

蟹江町歴史民俗資料館

年報

第44冊

令和6年2月

蟹江町歴史民俗資料館

目次

I	歴史民俗資料館概要	1
1	沿革	1
2	施設概要	1
II	歴史民俗資料館事業	2
1	展示	2
(1)	常設展示	2
(2)	特別展示	3
(3)	企画展示	3
2	教育普及	5
3	資料の収集・保管	12
(1)	収集資料の特色	12
(2)	収蔵資料の状況	12
4	調査・研究	14
5	情報提供	14
6	利用状況	14
III	文化財保護事業	16
1	文化財保護審議会	16
2	文化財保護等事業費補助事業	16
3	文化財公開事業	16
4	文化財普及・啓発事業	17
5	文化財保存活用地域計画作成事業	18
IV	資料編	20

蟹江町歴史民俗資料館特別展

来て！ 見て！！

かにカニ 2022



①うちわ（館蔵） ②置物 ③蟹江祭馬具（川西町内会所蔵） ④茶碗（館蔵） ⑤JR蟹江駅南口地面
⑥灰皿（館蔵） ⑦刺繍額（加藤一男作 加藤学所蔵） ⑧置物（館蔵） ⑨蟹江町水道事務所前マンホール

令和4年7月22日（金）～8月31日（水）

月曜休館 午前9時～午後5時

場所 蟹江町産業文化会館 1階 企画展示室
（蟹江町城一丁目214番地）

主催 蟹江町教育委員会

問合先 蟹江町歴史民俗資料館

TEL/FAX 0567-95-3812

ごあいさつ

蟹江の地名は、カニが多く生息していたことからついたという説があります。つい、カニをモチーフとしたグッズを選んでしまう、という町民の方も少なくないのではないのでしょうか。

当館では、平成11年(1999)にカニグッズ収集家の方々のご協力のもと、特別展「来て見て蟹！かに！！カニ！」を開催、以降カニに関する資料や情報収集を継続し、平成14年(2002)には特別展「来て！見て！！かにカニ2002」を開催して多くの反響をいただきました。そして、これらの展示より約20年近く経過した令和元年(2019)、展示をご覧になり刺激を受けた方の一人である大木繁代様より、ご自身で収集されたカニに関する資料236点をご寄贈いただきました。

これを契機に2022年となるこの年に、大木様のコレクションを公開するとともに、当館で収集した資料や町内にあふれるカニをモチーフとした資料等を展示紹介し、カニに親しんでいただく機会とするため、特別展を企画いたしました。

この展示を通して、「カニ」と「蟹江」について一層の愛着を持っていただきましたなら幸いに存じます。

なお、当展開催にあたり、関係各位には多大なるご尽力、ご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

令和4年7月22日

蟹江町歴史民俗資料館

蟹江の地名とカニ

蟹江町には、かつてたくさんのカニが生息していました。蟹江町には多くの川が流れていますが、現在川の周辺でカニの姿を見ることはなく、蟹江の地名がカニに由来すると言っても信じられない、と思うかもしれません。しかし、今から60年前までは日光川や蟹江川は海水が混ざる汽水域で、カニが繁殖しやすい環境でした。当時の土の堤防にはカニ穴が無数にあり、満潮の時にはカニ穴から水が浸みだしてきたので、川沿いの家では、敷地の周囲に溝を作らなくてはならなかったそうです。庭にもよくカニが入ってきたそうで、本当に、カニは蟹江町の人にとって身近な存在だったのです。当時のことを知る方であれば、「カニがいるから蟹江町」というのは当然のことだったと想像できます。

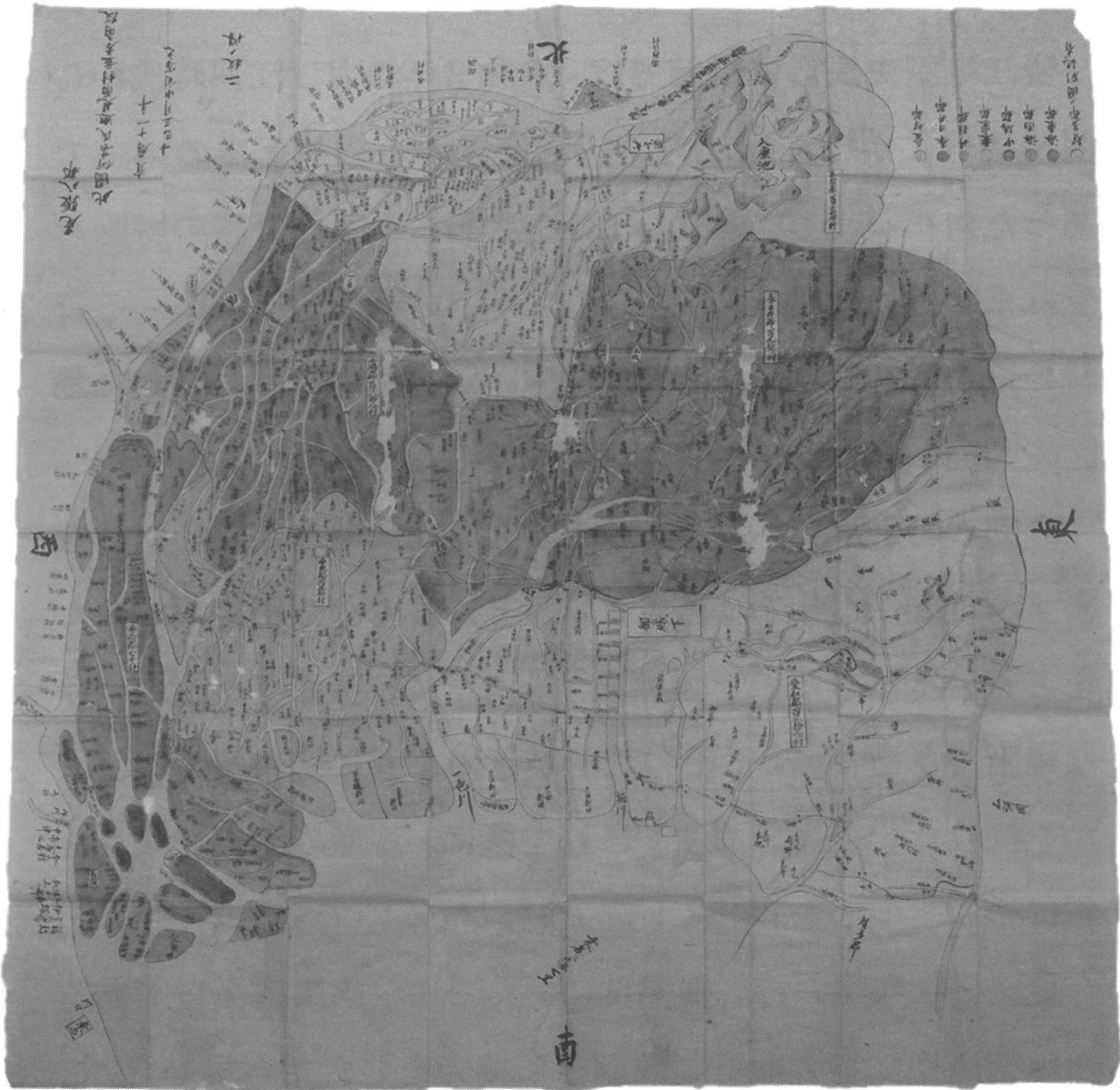
さて、文献史上「蟹江」の地名が最初に登場するのは、建保3年（1215）の『水野家文書』であるとされています。ただ、寿永元年（1182）に造られた木造十一面観音立像を本尊とする須成の龍照院が「蟹江山」の称号を持つことを考えると、水野家文書の時代より遡ることができると思われます。

ところで、蟹江にいたカニはどんなカニだったのでしょうか。地元では「ショウジョウマッカ」と呼んで親しんでいたそうですが、「アカテガニ」や「ベンケイガニ」といった種類であったといえます。数センチほどの小さなカニで、日光川近くの家で生まれ育った小説家小酒井不木はこれを「然しさすがに、蟹江の名に因んでか、蟹は随分沢山居る、土手から川へ移り行く部分には豆粒ほどの小さな蟹がぎつしり穴を掘つて居る、甲の平べつたいのでなくて食ふことの出来ぬ、いたづら蟹だ」と自伝で語っています。

カニの地名は水と関係が深いとされ、一説によると災害地名であるともいわれています。当町も昔から水害にみまわれることが多く、対策に追われてきました。そして伊勢湾台風による大被害を受けた後の昭和37年（1962）に県の水害対策として日光川の河口に水門が造られ、川に海水が混じることはなくなりました。以降災害は軽減されましたが、カニは姿を消しました。

蟹江町歴史民俗資料館特別展

国絵図からみる蟹江町 ～「永田家文書」より～



尾張八郡絵図（愛智・春日井・丹羽・葉栗・中嶋・海西・海東） 宝暦11年（1761）写

令和4年11月3日（木）～12月25日（日）

午前9時～午後5時（月曜日休館） 入館無料

場所 蟹江町歴史民俗資料館

蟹江町城一丁目214番地 蟹江町産業文化会館内

TEL/FAX 0567-95-3812

主催 蟹江町教育委員会

開催にあたって

蟹江町歴史民俗資料館では、令和3年3月、江戸時代から明治時代にかけて蟹江町南部に位置する鍋蓋新田の地主であった永田家より、約1,300点あまりもの資料の寄贈を受けました。整理をすすめるなかで、鍋蓋新田に関連する資料のほか、江戸時代の尾張国を描いた絵図をはじめとした地図や図面が多数あることが確認できました。

今回の特別展では、それらの絵図を初公開させていただきます。皆様には当時の尾張地方がどのような様子であったかをご覧いただきたいと思います。そして、蟹江町がどのような場所であったのか、その地形がどのように変わっていたのかを探りたいと思います。これを機に、地域の歴史や成り立ちについて関心を寄せていただければ幸いです。

最後に、今回の特別展開催にあたって、永田家当主である永田智康様に多大なるご理解とご協力をいただきました。ここに感謝を申し上げます。

令和4年11月吉日

蟹江町歴史民俗資料館

1 永田家について

「永田家系図」によれば、永田家の歴史は約500年前までさかのぼることができ、当主の**智康氏**は十五代目にあたります。

初代**家治**から四代目**家信**までは松平家に仕える武士であり、なかでも二代目**家直**は松平元康（徳川家康）の弓の師範を務めるほどの腕前であった、とされています。

五代目**信村**の頃、永田氏は武士を辞したと推測されます。住所も池鯉鮒（現知立市）から今岡村（現刈谷市）に移ります。また信村の二子のうち、家次は今岡村へ居住しますが、信家は池鯉鮒に留まり池鯉鮒宿本陣職を務めることとなります。

六代目**家次**のとき、息子・**正峯**が豪農である神戸家の長女・**勝**の婿となります。勝の父・正種は大宝前新田を開発したことでも知られています。**正峯**は文四郎を名乗りますが、神戸家の家督を継ぐ前に27歳で死去します。そのため**大翼**が改めて**勝**の婿となり、神戸家三代目として家督を継ぎました。

七代目**次得**の代になると、本町二丁目（現名古屋市）へと移住し、御園町（同）、木挽町（同）へと転居します。さらに神戸家から婿として八代目**元礼**を迎えます。元礼は大翼と勝の子であり、次得の甥にあります。また住居も元材木町（同）へと転居しています。

九代目**惟親**あるいは十代目**忠長**のとき、永田家は鍋蓋新田の地主となったようです。鍋蓋新田の宗門一札によれば、天明2年（1782）の地主は神戸家と伊藤次郎左衛門家でしたが、文化2年（1805）には永田家と伊藤次郎左衛門家が地主となります。約20年の空白がありますが、この期間中に永田家は神戸家から鍋蓋新田を購入したか、譲渡されたと推測されます。

安政4年（1857）、十一代目**直行**の代に永田家は鍋蓋新田へと移住します。直行も神戸家からの養子であることから、永田家と神戸家は密接な関係にあったといえるでしょう。

十二代目**家修**は、永田家中興の祖とされています。火災や暴風により永田家が困窮するなか、家修は大正5年（1916）から荒地の開墾をすすめ、同7年には完了させるなど、優れた経営手腕を発揮しました。また家修は名古屋と鍋蓋新田の両方に転居した、という記録が